

シンポジウム

SIV-4 全身性エリテマトーデスと妊娠
アフエレシス療法を併用してー

順天堂大学膠原病内科

○河西利昭, 前田伸樹, 宮方 了, 木村秀三,
森谷泰和, 梁 広石, 鈴木信吾, 渡邊 仁,
鈴木信吾, 松田幸博, 木田一成, 山路 健,
金井美紀, 東名正幸, 藤田 新, 津田裕士,
高崎芳成, 橋本博史

【目的】全身性エリテマトーデス(SLE)患者は、妊娠可能な年齢層の女性に多く、妊娠出産を希望する患者も少なくない。今回我々は、臨床的問題となる自己抗体をアフエレシス療法により低下させ、合併症のリスクを軽減できたので報告する。

【対象】①抗カルジオリヒン抗体(抗CL抗体)ないしループスアンチコアグラント(LAC)により習慣性流産の既往を持つSLE患者に対して免疫吸着療法を施行した。②新生児に先天性心ブロックを合併するリスクが高いと知られている抗SS-A抗体陽性の患者に対して二重膜濾過血漿交換療法を施行した。いずれの治療もアフエレシス療法に関して、患者への十分な説明を行い、理解を得た上で行った。

【方法】免疫吸着療法は、吸着カラムとしてデキストラン硫酸をリガンドとしたカラムを使用し、週1～2回の頻度で行った。二重膜濾過血漿交換療法は二重膜としてクラレ4A膜を使用した。処置血漿量は、妊婦への負担を考え、1回の治療で、1,000～1,500mlとした。抗凝固剤として、不正出血を防ぐ目的でメシル酸ナファモスタットを使用した。

【結果】抗CL抗体陽性患者ではステロイド剤の増量が必要な症例も認めたが、いずれの症例も流産となることなく、生児が得ることができた。抗SS-A抗体陽性患者においても新生児の先天性心ブロックを予防することができた。母体にも、出産後に明らかなSLEの増悪は認めなかった。アフエレシス療法による副作用は認められず、安全に施行できた。

【結論】抗CL抗体、ループスアンチコアグラントや抗SS-A抗体陽性のSLE患者の妊娠経過中のアフエレシス療法は、SLEの増悪や合併症の出現を予防できることが示唆された。

SIV-5 Baló病(同心円硬化症)における免疫吸着療法の効果

信州大学医学部第三内科

信州大学医学部附属病院人工腎臓部

○高 昌星, 柳澤信夫,
篠田俊雄, 小口寿夫, 新倉秀雄

【目的】Baló病はその病巣内で脱髄層と非脱髄層が同心円状に配列する特徴的な病理所見を呈する、中枢神経系の炎症性脱髄疾患である。本症の臨床像は急性、单相性の経過をとり予後不良とされるが、今回我々は2例のBaló病と診断した患者に副腎皮質ステロイド薬と免疫吸着療法を併用し、良好な結果を得たので報告する。

【対象および方法】症例1. 28歳, 日本人女性。主訴は歩行障害, 失語, 意識障害。1992年2月22日に頭痛, めまい, 歩行障害が出現。28日には歩行不能となり, 思ったことがしゃべれなくなった。3月3日には意識障害が出現し, 信州大学第三内科に入院。入院時意識は傾眠で全失語および四肢の協調運動障害を認め, 歩行は不能であった。Babinski徴候は両側陽性。症例2. 27歳, フィリピン人女性。主訴は歩行障害, 意識障害。1992年6月11日にフィリピンから来日し, 24日から歩行障害, 26日から意味不明の発語, 夜間不穏が出現。27日には半昏睡となり当科に緊急入院。入院時意識は半昏睡で除皮質姿勢であった。2例ともにMRIで多発性の病巣を認め, これらの病巣は中心部がT₁強調像でより低信号, T₂強調像でより高信号で外側の淡い高信号域内に特徴的な同心円層状構造を呈しており, 諸検査と合わせBaló病と診断した。副腎皮質ステロイド薬パルス療法の他に症例1は4回, 症例2は2回免疫吸着療法(IAPP)を施行した。いずれも一回の血漿処理量は2lとした。

【結果】2例ともに激症かつ難治性であり, 副腎皮質ステロイド薬のみでは効果が不十分であり, 副腎皮質ステロイド薬投与中にも再増悪を認めた。IAPP施行後意識障害をはじめとした臨床神経症状は段階的に明かな改善を伴い, MRI画像上の病巣の縮小を認めた。特に症例1では1年間1回/月IAPP施行し, 再発もなく完全寛解し, 現在に至っている。症例2ではIAPP施行後, 意識は半昏睡から追視ができるまでに改善した。

【結論】IAPPは難治性の急性炎症性脱髄性疾患であるBaló病に有効であり, 今後Baló病の治療に副腎皮質ステロイド薬とともに積極的に用いるべきであると考えられる。